

スペイン語とイタリア語における 指示形容詞の分布について

藤田 健

Distribution of the Demonstrative Adjectives in Spanish and Italian

Takeshi FUJITA

要旨 : In Spanish the system of the demonstrative adjectives consists of three elements, *este*, *ese* and *aquel*, while in Italian it consists of two elements, *questo* and *quello*. We examine the syntactic distribution of these demonstrative adjectives in the corpus (a Spanish text and its Italian translation, an Italian text and its Spanish translation, and the Spanish and Italian translations of texts written in other languages), taking into account the distributional correspondence between them and the definite article. We observe a close connection between *ese* and *questo*, a distant relation between *este* and *quello* and a distant relation between *aquel* and *questo*, and conclude that these characteristics are caused by the person feature of each demonstrative adjective.

キーワード : demonstrative adjectives, Spanish, Italian, person

0. 序論

指示形容詞は、指示詞という文法カテゴリーの下位体系をなす要素であると同時に、名詞の指示対象を決定する役割を担う決定詞にも属する。あらゆる言語に観察される一般的なカテゴリーであると言えるが、言語間でその特徴に差が見られる。

指示詞は、発話者からの距離の遠近に応じて下位区分される場合が多い。その代表的なものは、遠距離・中距離・近距離の三項体系をなすものと、中遠距離・近距離の二項体系をなすものであろう。前者は日本語に、後者は英語にそれぞれ観察される。距離に関してどの体系を選択するかは、必ずしも言語の系統関係によって決まるものではない。例えば、ロマンス諸語では、スペイン語とポルトガル語が日本語と同じ三項体系、イタリア語とルーマニア語が英語と同じ二項体系、そしてフランス語が距離の区別を設けない単一の体系をそれぞれ有している。この事実は、文法における指示詞のカテゴリー化が、系統関係に密接な関連をもっている冠詞や代名詞のような文

法カテゴリーとは独立した形で行われている可能性を示唆している。

従来、それぞれの言語において指示形容詞について個別に研究が進められているが、言語間の対照的視点からの研究はあまり進んでいないのが現状である。本稿では、スペイン語とイタリア語の指示形容詞の体系を対照的に考察すべく、両言語における分布を詳細に検討し、対応関係がどのようになっているかという点に焦点をあてて分析を進めていく。それぞれの言語における指示形容詞が他言語でどのような形式によって表現されるかを観察することによって、両言語の指示形容詞の相違点が明らかになる。両言語は指示形容詞の下位区分が異なるため、一方の言語の下位カテゴリーが他言語においてどのような下位カテゴリーに対応しているかを見ていく。また、同じ決定詞に属し、指示形容詞と密接な関係にある定冠詞にも着目し、一方の言語の指示形容詞に他言語の定冠詞がどのように対応しているかという点にも留意する。これによって、二項体系と三項体系がどのように関係づけられるかを明らかにし、両言語の指示形容詞に関して新たな特徴付けを行うことが本稿の目的である¹。

1. 両言語における指示形容詞の体系

1.1. スペイン語

スペイン語の指示詞の機能を簡潔に提示したものとして、Matte Bon(1995)があげられる。その主張によると、指示詞の機能は、明示的もしくは非明示的に既に現れた名詞を、発話行為の時間的・空間的座標を考慮に入れつつ、文法的人称に関係づけながら位置づけるものである(p.223)。este は話者が自身に物理的、時間的あるいは心理的に近接していると考えるものを、ese は対話者の領域にあると話者が考えるものを、aquel は自身からも対話者からも遠い、すなわちコミュニケーションにおいて直接含意されないものの領域に属すると話者が考えるものをそれぞれ指示する²(p.225)。

Butt and Benjamin(2004)は、個々の指示詞の具体的な機能を簡潔に説明する。este は話者の近くにあるか話者に結び付けられるものを指す。ese は話者からどの程度離れていても用いられ、時間ではなく空間が問題となる場合には aquel と交替可能である³。ただし、聞き手もしくは話者に近いものを指す場合には aquel は用いられない。aquel は空間が関与する場合には距離が遠いことを示唆し、二つの要素の間で空間における距離を比較した場合、aquel が ese よりも遠い要素を指す⁴。

(1) —¿Quién plantó ese árbol? “誰がその木を植えたの?”

Who planted INT tree

¹ 本稿の執筆にあたり、査読者から大変有益なコメントや誤り・不適切な表現の指摘を数多くいただいた。ここに深く謝意を表すものである。

² 指示形容詞は一般的に名詞に前置されるが、名詞に後置され冠詞と共に起する場合もある。Matte Bon は、このような場合、話者が心理的に遠ざけたり、侮蔑したり、容認していないというニュアンスが加わるとしている(pp.225-226)。

³ Butt and Benjamin は aquel が徐々に使用されなくなる傾向にあるが、いまだに大多数のスペイン語話者の間では用いられているとしている。これに対して De Bruyne(1995)は、ラテンアメリカでは ese の代わりに aquel が用いられる傾向があるとする。

⁴ 例文のグロスにおいて、スペイン語の指示詞には以下の略称を用いる：PRX=近称 INT=中称 RMT=遠称。イタリア語の指示詞は英語と同じ二項体系なので、英語の対応する指示詞を記す。

—¿Ese? —No, aque. “それのこと?” “いや、あれだよ。”
INT no RMT

要素が一つしか問題とされない場合、話者からある程度の距離にあるものを指示するには aque が一般に用いられる。時間が関与する場合には、aque は ese よりも遠い過去を指す。

(2) Debe de haber andado ya por sesenta años cuando se embarcó con aque horror
must have gone already around sixty years when embarked with RMT horror
de mujer.
of woman

“あの恐ろしい女性と船に乗った時には60歳くらいにはなっていたはずだ。”

この例で aque の代わりに ese を用いると、主語である男性が女性とまだ一緒にいることが含意される。すなわち、ese が心理的に近い過去を表すことになる(pp.81-82)。

De Bruyne は、este は1人称、ese は2人称、aque は3人称にそれぞれ関係づけられるとする。ese は聞き手が既に知っていたり、再び言及されるものを指すのに好んで用いられる(pp.170-171)。時間が関与する場合、現在を指示する表現では este が用いられる。現在からそれ程遠くない(と考えられている)過去や未来を指す場合、este もしくは ese が用いられる。aque は主に遠い過去を指すが、未来を指すこともある(p.172)。

また、ese は情意表現として用いられることもあり、侮蔑的意味を表す(p.173)。

(3) ¿Qué quiere ese hombre? “そいつは何を望んでいるのか?”
what wants INT man

次に、決定詞の特性を概念的に説明したものを見ていく。Enríquez(2000)は、指示詞においては、世界に対する指示は基本的に空間時間的なものであり、指示される空間や時間は三つの文法的な人称に関係づけられる三つの距離によって捉えられると説明する。この距離はもっぱら話者を唯一の軸としており、主観的な性質のものである。este は「私」に直接接する空間・時間、ese は近いもの、aque はより遠いものに対応する。ここで際立つのは対象の遠近性である。その指示はテキスト内でもテキスト外でも可能であるが、常に「私」と「あなた」とは別の要素が必要となり、このため常に文法的には三人称となる。このため、指示詞が主語となった場合には動詞は常に3人称となる(pp.315-316)。

(4) a. *Estos chicos teníamos buen humor.
PRX boys we had good humour “これらの子どもたちは機嫌がよかった。”
b. *Estas chicas hicisteis la compra.
PRX girls you did the shopping “これらの女の子たちは買い物をした。”

Hernández Alonso(1984)は、指示形容詞を決定詞の一つとして位置づけ、決定詞全体の中での特徴付けを行っている。決定詞は何らかの形で直示的特徴を有しており、

指示形容詞はコミュニケーションにおける対話者領域に関係する二次的な直示の特性を示す。直示は固有の意味内容は持たず、言語外の世界もしくはテキスト内における何らかの要素を指し示す働きをする。発話内容に重要な具体化と方向付けをもたらし、談話に影響を受ける。すなわち、発話行為、発話者、文脈更には状況に依存する相対的な指示要素である(p.559)。

Lamíquiz(1987)は、Bühler(1979)の説に従い、指示詞には現前 (ad oculos)、照応 (anafórica)、空想(am phantasma)の3つの役割があるとする。以下にその主張を述べる。

現前においては、3種類の空間で構成されており、これは言語の3つの人称に關係している。人称、場所、指示詞においてそれぞれ三項体系をまとめたものが次の表である。

1 人称	2 人称	3 人称
yo (私)	tú (君)	él (彼)

este やそれに準ずる形式の指示詞は、話し手の領域にあるものを指す際に用いられる。ese やそれに準ずる形式の指示詞は、聞き手の領域にあるものを指す際に用いられる。aquel やそれに準ずる形式の指示詞は、第三者、または話し手聞き手両方から離れた領域にあるものを指す際に用いられる(pp.149-150)。

照応については、指示対象の数によって用法が分かるとしている。単数の照応は、文脈において既に出てきた名詞が一つである場合に用いられ、este が用いられる。

(5) María llegó a casa de su madre con los tres niños. - ¡Cuánto quiero yo a estos
 arrives at home of her mother with the three children how much want I (to) PRX
niños! - exclamó la abuela.
 children exclaimed the grandmother

“マリアは三人の子どもと母の家に着いた。「この子たちにどれほど会いたかったことか！」と祖母は叫んだ。”

この単数の照応に強い指示性を伴う場合、すなわち、他のものとの対比とは無関係に指示する場合は ese が用いられる。

(6) Esa película que anuncian, es la que vi en Francia.
 INT film that they advertise is the one that I saw in France

“その宣伝されていた映画は私がフランスで見たものだ。”

上記の esa película は正確に「その映画」を示しており、他のいかなるものでもない。

二項の照応は、este と aquel が用いられる。より近い位置にある名詞、また文において二番目に位置する名詞を指す場合が este、より遠い位置にある名詞、また文において最初に位置する名詞を指す場合が aquel を使う。

(7) Tengo que referirme en este litigio - dijo el abogado - a problema y solución: pero
 I have to refer in PRX suit said the lawyer to problem and solution but

no puedo hablar de esta solución sin el estudio detenido de aquel problema.

not I can speak of PRX solution without the study detailed of RMT problem

“ 弁護士は言った。「この訴訟で、私は問題と解決策に言及しなければいけない。しかし、あの問題の詳細な検討なしにこの解決策について語ることはできない。」”

最後に複数（3つ以上）の照応である。この場合、文において最も近い位置にある名詞を指す場合が *este*、最も遠い名詞を指す場合が *aquel*、そのあいだは *el otro*（他の）や *el de más allá*（向こうの）などの形式が用いられる(p.151)。

(8)Se plantaron en el huerto un manzano, un ciruelo, un peral y un limonero;

were planted in the farm an apple tree a plum tree a pear tree and a lemon tree

este limonero no prendió, aquel manzano se secó, el otro peral nunca dio fruto y

PRX lemon tree not rooted RMT apple tree withered the other pear tree never gave fruit and

el ciruelo de más allá está hoy frondoso.

the plum tree of over there is today in leaf

“ 農園にりんごの木、プラムの木、西洋ナシの木、レモンの木を植えた。レモンの木は根付かず、りんごの木は枯れた。西洋ナシの木は一度も果物をつけず、プラムの木は今葉が生い茂っている。”

上記の二種類の指示詞の機能（直示、照応）は同時に成立することもありうる。

最後に空想に関しては、直示と照応を組み合わせることによって、存在しないものをそこにあるかのように表現する場合に用いられる。手紙において使用される指示詞がその代表的な例である。手紙の中で *esta ciudad*（この町）と書かれればそれは書き手の住む街であることが多く、*esa ciudad*（その町）と書かれればそれは受け手の住む街であることが多い(p.152)。

以上の三種類（直示、照応、空想）とは別に、時によっても指示詞は使い分けられる。過去を示すときは前方照応、現在を示すときは直示、未来を示すときは後方照応になることが多い(p.152)。

Hernández Alonso は、直示は照応外(*exofórica*)と照応内(*endofórica*)に分けられると主張する。前者は Bühler の現前 (*ad oculos*)にほぼ対応し、後者は空想(*de fantasía*)を含むものもあり、更に前方照応と後方照応に分かれる。照応外の直示は、外的指示対象に向けての提示を行うもので、これによって話者は何らかの要素を人称的、空間的あるいは時間的に指し示す。照応内の直示はテキストの一貫性を保つために重要なものであり、既に述べられたものあるいはこれから述べられるものを指し示す機能を担う。これによりコミュニケーションにおける高度な経済性が実現され、メッセージにおいて重要な要素が心理的に示されるのである。指示詞における支配的な素性が挙げられているが、その中で指示形容詞に関係するのは「+直示性」「±照応内性」「±照応外性」「±前方照応性」「±後方照応性」「±発話者の領域」「±男性」「±単数」「+付加語性」である。*este* と *ese/aquel* は「±発話者の領域」において値が異なることになる(pp.560-561)。

López García(1998)は、異なる視点から指示詞を分析している。指示詞は直示と密

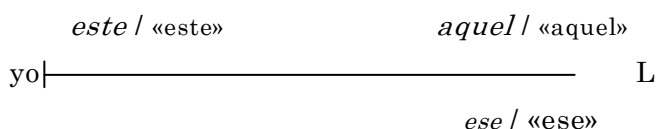
接に関係しているとし、指示詞が関係する直示の性質を三つあげている。すなわち、発話者を起点とすること、近称指示詞 *este* の使用はこの起点を中心に求心的な解釈を生じさせること、場所に関わる性質をもつことである(pp.254-255)。この三つの性質を有する点において、指示詞は典型的な直示表現である。近称・中称・遠称の使用に関しては、人称との関連において以下の三つの状況が考えられる。

	1			2			3
	yo	tú	él	yo+tú	él		<i>este</i> <i>aquel</i>
	<i>este</i>	<i>ese</i>	<i>aquel</i>	<i>este</i>	<i>ese</i> <i>aquel</i>		<i>ese</i>

1 と 2 の状況は現前的(ad oculos)直示の場合である。1 の状況が文法家によって指摘されてきたもので、*este* が 1 人称、*ese* が 2 人称、*aquel* が 3 人称と関係づけられる。2 の状況では *este* が唯一近い距離を表すもので、1, 2 人称と関連付けられる。3 の状況は人称との関係が存在しない場合であり、照応の場合と空想の提示(*mostración de fantasía*)が該当する。この場合は距離の対立はもっぱら *este* と *aquel* の対立によって表わされ、*ese* は距離が関与しない中立的な形式として用いられる(pp.257-258)。

人称との関係は限られた用法において関与するものであり、より重要なのは起点からの距離である。起点は、*yo* (私) が占める位置、*yo* が話す時点及び *yo* の心理的人称(*persona psíquica*)という三つの要素を前提としている。位置が前面に出る場合、直示は現前的となり、*este/ese/aquel* が距離に対応する。時点が優勢である場合、直示は照応的であり、距離に対応するのは *este* と *aquel* のみとなる。*ese* は同定する機能しかもたない(p.259)。心理的実在が中心となる場合には、直示は認識的、すなわち空想提示となる。*ese* が中立的な項となり、*este* と *aquel* はそれぞれ心理的近さと遠さを表す(p.260)。

これら三つのタイプの直示は、以下の図式に統合される。



ここでイタリック体は形式を、引用符表示は意味内容を、L は距離の段階を示す軸をそれぞれ表している。*este* は起点からの近さを、*ese/aquel* は遠さを示す。更に、*este* と *aquel* では形式が意味内容より優勢であるのに対し、*ese* では意味内容が優勢となっている。このことから、照応と認識の直示として *ese* は同定の価値を持つのに対し、*este/aquel* は位置づけの価値を持つ。一方、言語記号は話者における形式の側面と聞き手における意味内容の側面で不均衡が生じる。この結果、*ese* は聞き手における意味内容に結び付けられ、結果として現前的直示において *ese* が 2 人称に、*este* が 1 人称に、*aquel* が 3 人称に関係づけられることとなる(p.261)。

最後に、独自の視点を示している Eguren(1999)を見ておこう。Eguren によると、意味論的には、指示詞は現実世界と可能世界の両方を同定し、この意味で指示表現であり、指示対象の同定可能性に関与する構文において役割を果たす。しかし、指示詞

は直示的表現として、指示対象の同定に加えて、直示の中心に関係する何らかの情報を付け加える。具体的には、発話の文脈に含まれる要素を、話者が存在する位置を基準にして位置づけるのである。従って、指示詞は指示的同定と直示的位置づけという二つの基本的な意味素性を兼ね備えていると言える(pp.938-939)。

伝える情報という観点からは、指示詞は人称と場所の両方に関わる直示表現である。すなわち、直示の文脈のゼロ地点からの相対的な距離に基づいて構成される、3人称代名詞の特定化された形式である。これにより、*este* は近さ、*ese* は近さと遠さの中間、*aquel* は遠さをそれぞれ表す。現前的直示のいくつかの場合において、*este* は話者が存在する場所を、*ese* は聞き手の場所を、*aquel* は両者とは異なる場所をそれぞれ同定する。しかし、このような客観的な位置情報は、別の直示的状况においては変更される。指示詞の体系は、話者がその範囲を主観的に決定する、直示の中心から離れた三つの同心円として表示できる(p.940)。

この三項体系は、特にイベリア半島のスペイン語における身振りを伴う直示や象徴的直示において成立するもので、アメリカ大陸のスペイン語では、*aquel* の代わりに *ese* を用いて二項体系となる傾向がある。一方、空想提示の直示や時間用法、照応用法においては、体系は単純化され、*este* が話者への近さを、*aquel* が遠さをそれぞれ表し、*ese* は用いられないか中立化されるのである(p.940)。

指示詞は、別な観点からは不透明な(*opaco*)直示表現である。すなわち、指示対象を明確に同定するために、身振りや文脈による情報を必要とし、発話行為の中の異なる要素を指示することができる。このため、その意味内容のなかに不確定な提示という素性を含む不完全な(*incompleto*)直示表現であると言える(pp.941-942)。

また、指示詞体系はその柔軟性によって客観的な距離を含意せず、いわゆる情意的な(*empatético*)直示を容易に認める。これにより、*este* を *ese* や *aquel* の代わりに用いて親愛の情を示したり、時間もしくは空間的に遠い実体を心理的に近いものとして提示することができる。また、*este* の代わりに *ese* を用いることで、近くにある実体を心理的に遠ざけ、侮蔑の意味を加えることができる(p.941)。更に、指示詞は、文の中においてであれテキストにおける別の文の間であれ、照応的に用いられる。この照応的用法は、対話よりは分析的な文章や語りにおいて多く用いられる(p.942)。

1.2. イタリア語

Dardano and Trifone(1997)によると、指示形容詞は、ヒトあるいはモノを空間、時間、談話における遠近の関係によって決定する。その機能は、ものを指す仕草のように「指し示す」ことであり、談話ではしばしば人差し指を伸ばして行われる。これが直示的機能である(p.212)。Sensini(1997)も指示形容詞は、話者や聞き手を基準にして、ヒトやモノの空間、時間、談話における位置を示すとする(p.160)。Serianni(1997)は、モノを現実の空間や想定上の空間の中で指示する直示的機能のほかに、指示詞はすでに言及されたヒトやモノを指示する前方照応的機能と、後に言及するヒトやモノを指示する後方照応的機能をもつと指摘する(p.195)。

指示形容詞の機能は定冠詞のそれと多くの点で共通しており、両者は相補分布をなす。冠詞と指示詞の機能の類似性は、ロマンス諸語の定冠詞がラテン語の指示代名詞

から派生したという歴史的事実にも確認される(Dardano and Trifone p.212)。

個々の指示形容詞の機能については、Dardano and Trifone は、questo は話者に近いヒトやモノを指し、quello は話者と聞き手から遠いヒトやモノを指すとする。聞き手に近いヒトやモノを指す形式として codesto があるが、文学や官僚的な文章、トスカーナ方言において用いられるのみである(pp.212-213)。Sensini も、questo は話者(メッセージの発信者)に近いヒトやモノを指し、quello は話者からも聞き手(メッセージの受信者)からも遠いヒトやモノを指すとする。聞き手に近いヒトやモノを指す codesto は、実質的に用いられなくなり、代わりに quello が用いられる。この距離の遠近は物理的距離、時間、談話、心理的空間のいずれにおいても成立する(pp.161-162)。

Maiden and Robustelli(2000) は、questo は 1 人称指向(first-person oriented)であり、話者もしくは書き手が空間もしくは時間において近いとみなすものや何らかの方法で密接に関係づけられるものに適用されると説明する。しばしばそのような近さは、言及したばかりであることに対応することもある。これに対して quello は、遠さに対応する非 1 人称指向の要素である。2 人称指向の指示詞として codesto があるが、トスカーナ方言や古風で官僚的な文章に使用が限られる(p.82)。Serianni は、questo は話者への近さ、codesto は聞き手への近さ、quello は両者からの遠さを示すが、この距離は具体的な空間におけるものであっても必ずしも計量可能なものではないと指摘する。話者から遠くにあるものであっても、話者が重要であると考えられるものを指すには questo が用いられる。

(9) Lascia a me queste lacrime, Carino.

leave to me PRX tear dear “愛しい人よ、私にこの涙を流させておくれ。”

すなわち、questo は名詞を 1 人称の領域に、codesto は 2 人称の領域に、quello は 3 人称の領域にそれぞれ位置づける。しかしながらこの三項体系は、談話ではトスカーナ方言において、語りでは伝統的な文学や官僚的な文章においてのみ保持されており、一般的には questo と quello が代わりに用いられるとする(pp.194-195)。

Renzi et al.(2001)が指摘している指示形容詞の特殊な用法として、強意用法(uso enfatico)がある。これは、感嘆文において、指示形容詞が固有名詞を修飾する例にあたる。この場合、名詞はすでに明確に同定されているので、指示詞は直示的に用いられているのではなく、指示対象に注意を向けることでその否定的もしくは肯定的特性を強める機能を担う。普通名詞を修飾する場合にもこの機能を担うことができる(p.642)。

(10) a. Che stupida, questa Maria!

how stupid this “なんてバカなんだろう、このマリアは！”

b. Quella Roma è meravigliosa!

that Rome is wonderful “あのローマは素晴らしい！”

c. Sono tutti studiosi, questi ragazzi!

are all studious these boys “みんな勉強熱心だ、この子たちは！”

d. Quell'imbecille, si comporta sempre male!

that fool behaves always ill

” あのバカは、いつもよからぬことをしてくれる！”

2. 指示形容詞の分布

本節では、それぞれの言語における指示形容詞の分布を観察する。距離による下位区分のカテゴリーごとに、指示形容詞がどの程度の割合で生起するかを示し、その特徴を記述する。

使用するテキストは、マリオ・バルガス・リョサ作「密林の語り部」とアルトゥーロ・ペレス・レベルテ作「アラトリステ I」(いずれもスペイン語作品)の原典とイタリア語訳、イタロ・カルヴィーノ作「木のぼり男爵」とウンベルト・エーコ作「前日島」(いずれもイタリア語作品)の原典とスペイン語訳、アンドレ・マルロー作「人間の条件」(フランス語作品)とアーネスト・ヘミングウェイ作「武器よさらば」(英語作品)のスペイン語訳とイタリア語訳である⁵。いずれも小説で、地の文と会話部分に分けられるため、発話のタイプである語りと談話の区別も考慮に入れて分布を見ていく。語りとは小説の地の文のように特定の対話者を想定しない発話であり、談話とは会話のように特定の対話者が存在する発話行為における発話である⁶。

2.1. スペイン語における分布

スペイン語の全テキストにおいて、指示形容詞の生起数は 3,987 例であった。この中で、近称は 1,193 例、中称は 960 例、遠称は 1,834 例である。このことから、スペイン語の指示形容詞の中で、遠称の使用頻度が突出して高い(46.0%)と言え、特に中称と比較すると 2 倍近い数に上った。それぞれのカテゴリーについて、語りと談話に分けた分布を加えて示すと以下ようになる。

	語り	談話	総数
近称	659	534	1,193
中称	682	278	960
遠称	1,752	82	1,834
総数	3,093	894	3,987

この結果から分かるのは、下位カテゴリー間で分布に偏りが見られるということである。今回分析の対象としたテキストには、語りの部分が会話部分よりもかなり分量が多いという共通点が見られる。これは、小説というジャンルの文学作品には一般的に

⁵ 以下では、出典を示す際に作品を次に示す略号で表すこととする。

密林の語り部 EH、アラトリステ I AL、木のぼり男爵 BR、前日島 IG、人間の条件 CH、武器よさらば FA

⁶ 語り(récit)と談話(discours)には別の定義もある。Maingueneau(1994)は、Benveniste(1966)の考え方に則って次のように定義づけている。談話とは、「発話状況によってその指示内容が決定される要素である転位語(embrayeur)を含んでいる発話のタイプで、語りは転位語を含んでいないもの」である(p.74)。前者は主に口語、後者は文語に対応するが、必ずしもこの関係が成立するとは限らない。本稿では、指示詞の解釈においては、特定の対話者の存在の有無が重要な役割を果たしているとの認識から、本文で示した定義に基づいて分析を進めることとする。

観察される傾向である。このため、語りの生起例が談話の生起例よりも多いのは当然の結果であると言えるが、その中でも近称における談話の割合が極めて高いのに対し、遠称においてはその割合が極端に低くなっている。全体の生起数に対して談話の例が占める割合を見ると、指示形容詞全体が 22.4%、近称が 44.8%、中称が 29.0%、遠称が 4.5%となる。このことは、談話における各カテゴリーの占める割合を見ても明らかとなる。近称は 59.7%を占め、中称は 31.1%、遠称は 9.2%に過ぎない。この数字は、各カテゴリー間の機能の相違を示していると考えられる。談話では、発話状況を前提とした直示的用法が多くなる。このことから、近称の指示形容詞は直示的に用いられる場合が比較的多いのに対し、遠称の指示形容詞では直示的用法がかなり限られていると考えられる。また、機能の観点から見ると、直示的用法においては近称が大きな位置を占めていると言える。

これに対して、語りにおける各カテゴリーの割合は、近称が 21.3%、中称が 22.0%、遠称が 56.6%となっている。語りでは言語的文脈において提示された要素を指示する照応的用法が多い。従って、これらの数字が示しているのは、照応的用法では遠称が極めて大きな役割を果たしているという点である。ただし、近称や中称もある程度の割合を示していることから、直示的用法に比べて分布の偏りが少ないということが言える。特に、中称の指示形容詞は語り、談話とも一定の割合で生起しており、直示的用法と照応的用法のいずれにおいても比較的用いられやすいということが分かる。

2.2. イタリア語における分布

イタリア語の全テキストにおいて、指示形容詞の生起数は 3,902 例であった。この中で、近称は 1,299 例、中遠称は 2,603 例である。このことから、イタリア語の指示形容詞では中遠称の使用頻度が高く、近称と比較すると 2 倍以上の数に上っている。それぞれのカテゴリーについて、語りと談話に分けた分布を加えて示すと以下のようになる。

	語り	談話	総数
近称	726	573	1,299
中遠称	2,256	347	2,603
総数	2,982	920	3,902

この結果から、イタリア語の指示形容詞の場合にも下位カテゴリー間で分布に偏りが見られるということが分かる。既に述べたように、語りの生起例が談話の生起例よりも多いのは当然の結果であると言えるが、その中でもやはり近称における談話の割合が極めて高いのに対し、中遠称においてはその割合が低くなっている。全体の生起数に対して談話の例が占める割合を見ると、指示形容詞全体が 23.6%、近称が 44.1%、中遠称が 13.3%となる。談話における各カテゴリーの割合を見ても同様の傾向が明らかである。近称は 62.3%を占め、中遠称は 37.7%にとどまる。

これに対し、語りの例における各カテゴリーの割合は、近称が 24.3%、中遠称が 75.7%である。2.1 で述べたように、談話では直示的用法、語りでは照応的用法が多くなることから、直示的用法においては近称が、照応的用法においては中遠称がそれぞれ大き

な役割を果たしているということが言える。

2.3. スペイン語とイタリア語の分布の比較

ここでは、スペイン語とイタリア語について得られた結果を比較検討していく。まず、両言語に共通して存在する近称の分布を比較する。指示形容詞の総数に占める近称の割合は、スペイン語が 29.9%、イタリア語が 33.3%となり、両言語においてそれ程大きな差は見られない。談話と語りに分けてみると、既に示したように、談話において近称の占める割合はスペイン語が 59.7%、イタリア語が 62.3%であり、語りについてはスペイン語が 21.3%、イタリア語が 24.3%である。いずれもイタリア語の方が若干高い数値を示しているが、基本的に同じ傾向を示していると言える。また、既に見たように、近称の総数における談話の占める割合は、スペイン語が 44.8%、イタリア語が 44.1%となっており、ほとんど同じであるとみなしてよい。このことから、スペイン語とイタリア語では近称指示形容詞の分布に関して大きな違いはないと結論付けられる。

次に、中称と遠称について考察する。スペイン語は中称と遠称を区別するのに対して、イタリア語では中称と遠称の機能を一つの形式が担っている。そこで、スペイン語の中称と遠称の合計とイタリア語の中遠称を比較してみる。

	語り	談話	総数
スペイン語の中称と遠称の合計	2,434	360	2,794
イタリア語の中遠称	2,256	347	2,603

それぞれの形式において談話が占める割合は、スペイン語の中称と遠称の合計が 12.9%、イタリア語の中遠称が 13.3%となり、ほとんど差がないと言える。このことから、イタリア語の中遠称の指示形容詞は、スペイン語の中称指示形容詞と遠称指示形容詞の機能をあわせもった形式であると言えるであろう。

3. スペイン語とイタリア語の間の指示形容詞の対応

本節では、スペイン語とイタリア語の指示形容詞の対応関係について考察を進める。一方の言語の指示形容詞が他方においてどのような形式に対応しているかを見ることによって、両言語における指示形容詞の機能がどのような関係にあるのかを考察する。

3.1. スペイン語の指示形容詞のイタリア語における対応表現

まず、スペイン語の指示形容詞がイタリア語の対応表現においてどのような形式で現れるかを観察する。本稿が対象としたテキストにおいて生じたスペイン語の指示形容詞は 3,987 例であるが、この中でイタリア語テキストにおいて対応表現がみとめられない例を除いた数は 3,833 例である⁷。下位カテゴリーごとの内訳は、近称 1,103 例、中称 923 例、遠称 1,807 例である。それぞれのカテゴリーごとにイタリア語にお

⁷ 対応表現がみとめられない場合とは、名詞句ではなく副詞等の表現に変えられているものや、全く対応する部分が見出されないものである。

ける対応関係を示したのが以下の表である⁸。具体的な例も示す。

西語 \ 伊語	近称	中遠称	定冠詞	その他
近称 1103 例	942(85.4)	59(5.3)	63(5.7)	39(3.5)
中称 923 例	142(15.4)	671(72.7)	63(6.8)	47(5.1)
遠称 1807 例	31(1.7)	1,500(83.0)	237(13.1)	39(2.2)

この結果で特に留意すべきは、定冠詞との交替が一定の割合で観察されるという点である。以下に例を示す。

(11) スペイン語の近称にイタリア語の定冠詞が対応している例

a. He vuelto a ver a Catherine esta noche. (FA)

I have returned to see (to) PRX evening

b. Sono ritornato da Catherine, la sera.

I have returned to the evening

“今晚キャサリンに会いに戻ってきたんだ。”

(12) スペイン語の中称にイタリア語の定冠詞が対応している例

a. Había llovido un poco muy de mañana y quedaban huellas de barro por el suelo de

it has rained a little very of morning and remained traces of mud by the floor of

la taberna, con ese olor a humedad y serrín que en los lugares públicos dejan

the bar with INT smell with damp and sawdust that in the places public they leave

los días de agua. (AL)

the days of water

b. Aveva piovuto un po' all'alba e restavano impronte infangate sul pavimento della

it has rained a little at dawn and remained traces muddy on the floor of the

taverna, insieme all'odore di umidità e di segatura che lasciano nei locali

bar with the smell of damp and of sawdust that they leave in the places

pubblici i giorni di pioggia.

public the days of rain

“早朝に雨が少し降ったので居酒屋の床には泥のあとが残っており、湿った匂いと、雨の日に公共の場にまかれるおがくずの匂いがした。”

(13) スペイン語の遠称にイタリア語の定冠詞が対応している例

a. Sólo existía aquel pie, aquel hombre al que debía herir sin que

only existed RMT foot RMT man to whom he should wound without that

se defendiese, porque, si llegara a defenderse, llamaría. (CH)

he defend himself because if he arrived to defend himself he would call

b. Esisteva soltanto quel piede, l'uomo che egli doveva colpire senza che potesse

existed only that foot the man that he should hit without that he could

⁸ 括弧内の数字はそれぞれのカテゴリーにおける割合を示す。「その他」には、所有形容詞、不定冠詞、無冠詞、指示代名詞等が含まれる。

difendersi, perché difendendosi avrebbe chiamato.

defend himself because defending himself he would call

“彼にとっては、今はその足しか、その男しか存在していなかった。その男は抵抗させないで殺さねばならぬ。抵抗のすきを与えると、助けを呼ぶだろうから。”

指示形容詞は定名詞句を決定するという点で定冠詞と共通する機能をもっている。しかし、指示形容詞は名詞句の指示対象を特定化する働きが強いのに対して、定冠詞は中立的な要素である。一定の割合でスペイン語の指示形容詞にイタリア語の定冠詞が対応しているという事実は、スペイン語の指示形容詞とイタリア語の定冠詞に機能の連続性があるということを示唆している。特に、遠称指示形容詞に定冠詞が対応している例の割合が他の指示形容詞に比べて高いことが注目される。これは、スペイン語の遠称指示形容詞が他の指示形容詞よりも、機能的にイタリア語の定冠詞との重なりが多いということを示している。

次に、指示形容詞同士の対応は見られるが、カテゴリーが異なっている場合を見てみる。以下に例を示す。

(14) スペイン語の近称にイタリア語の中遠称が対応している例

a. *Éste residía en Udine y circulaba de este modo casi cada día para ver cómo iban las cosas.* (FA)

went the things

b. *Stava a Udine e usciva a quel modo quasi ogni giorno per vedere come andavano le cose.*

went the things

“彼はウディネに住んでいて、ほぼ毎日戦況を視察しにそのようにやってくる。”

(15) スペイン語の中称にイタリア語の近称が対応している例

a. *Creo que en esos instantes un moribundo se convierte en un Hércules que estrangula las serpientes en la cuna.* (IG)

strangle the snakes in the cradle

b. *Creo che in questi istanti un morente diventi un Ercole che strozza i serpenti nella culla.*

in the cradle

“思うに、このような瞬間、瀕死の男はヘラクレスに変身して、ゆりかごの中の蛇を絞め殺すことができるのだろう。”

(16) スペイン語の遠称にイタリア語の近称が対応している例

a. *Los jefes de aquellos grupos habían visitado ya los garajes, y no*

the chiefs of RMT groups had visited already the garages and they not

se equivocarian. (CH)

would make a mistake

b. I capi di questi gruppi avevano già esplorato le rimesse e non

the chiefs of these groups had already explored the garages and they not

si sarebbero ingannati.

would make a mistake

“これらのグループの指導者たちはすでにガレージを見てまわって調べていたので、間違えることはなかっただろう。”

スペイン語の近称がイタリア語の中遠称に対応している例はスペイン語の近称全体の中で 5.3%、スペイン語の中称がイタリア語の近称に対応している例はスペイン語の中称全体の 15.4%、スペイン語の遠称がイタリア語の近称に対応している例はスペイン語の遠称全体の 1.7%である。この数値が示しているのは、スペイン語の中称の機能においてイタリア語の近称と重なる部分が多いのに対し、スペイン語の遠称の機能においてはイタリア語の近称と重なりが少ないということである。

3.2. イタリア語の指示形容詞のスペイン語における対応表現

次に、イタリア語の指示形容詞がスペイン語の対応表現においてどのような形式で現れるかを観察する。本稿が対象としたテキストにおいて生じたイタリア語の指示形容詞は 3,902 例であるが、この中でスペイン語テキストにおいて対応表現がみとめられない例を除いた数は 3,709 例である。下位カテゴリーごとの内訳は、近称 1,224 例、中遠称 2,485 例である。それぞれのカテゴリーごとにスペイン語における対応関係を示したのが以下の表である。具体的な例も示す。

伊語 \ 西語	近称	中称	遠称	定冠詞	その他
近称 1,224 例	942(77.0)	142(11.6)	31(2.5)	41(3.3)	68(5.6)
中遠称 2,485 例	59(2.4)	671(27.0)	1,500(60.4)	147(5.9)	108(4.3)

イタリア語の指示形容詞も、スペイン語の定冠詞と一定の割合で対応している。以下に例を示す。

(17) イタリア語の近称がスペイン語の定冠詞に対応している例

a. Cambiava sempre tono, questa bambina, e mio fratello tutte le volte restava

changed always tone this girl and my brother all the times remained

stonato. (BR)

confused

b. La niña cambiaba siempre de tono, y mi hermano todas las veces quedaba

the girl changed always of tone and my brother all the times remained

desconcertado.

confused

“この小娘は、いつも口調を変えていて、兄はそのたびにとまどってしまうのだった。”

(18) イタリア語の中遠称がスペイン語の定冠詞に対応している例

a. Era stato quel chiasso attorno a Cosimo a dar l'allarme agli agricoltori che
had been that noise around to give the alarm to the farmers that
stavano all'erta. (BR)

were at the slope

b. Había sido el ruido en torno a Cosimo lo que había dado la alarma a los
had been the noise around that had given the alarm to the
agricultores que estaban alerta.

farmers that were on alert

“ コジモをはやしたてたあの騒ぎが、斜面にいた農夫たちに警報を発することになったのだ。”

ただし、イタリア語の近称指示形容詞がスペイン語の定冠詞に対応している割合は中遠称に比して低いので、中遠称指示形容詞の方がスペイン語の定冠詞と機能的に重なりが多いと言える⁹。

指示形容詞同士の対応でカテゴリーが異なる例を見ると、イタリア語の近称がスペイン語の中称と遠称に対応している例はそれぞれイタリア語の近称全体の中で 11.6%と 2.5%であり、イタリア語の中遠称がスペイン語の近称に対応している例はイタリア語の中遠称全体の 2.4%である。以下に例を示す。

(19) イタリア語の近称がスペイン語の中称に対応している例

a. Accidenti, un peccato, a giudicare da questa foto tua mamma doveva essere
damn a pity to judge from this photo your mother must have been
molto giovane, no, Saúl? (EH)

very young not

b. Hombre, qué pena, a juzgar por esa foto tu mamá debía ser muy joven ¿no
damn what pity to judge by INT photo your mother must have been very young not
Saúl?

“ そう、気の毒に。その写真で見ると、君のお母さんはかなり若かったようだね、サウル？”

(20) イタリア語の近称がスペイン語の遠称に対応している例

a. Come uscire dopo questa parola vana? (CH)

how go out after this word empty

b. ¿Cómo salir de aquella vana promesa?

how go out by RMT empty promise

“ そんな気休めの言葉を残して立ち去れるだろうか。”

(21) イタリア語の中遠称がスペイン語の近称に対応している例

⁹ この傾向は、(13)の例において観察したスペイン語遠称指示形容詞とイタリア語定冠詞との機能的連続性と共通しており、定冠詞と遠称指示形容詞との機能的連続性が一般に存在するという可能性が査読者から指摘された。この傾向は、指示形容詞におけるカテゴリー間の機能の違いを示唆するものである。3.5においてその原因を考察するが、詳細な検討は今後の課題である。

a. Quelle cartoline sarebbero piaciute molto in America. (FA)

these postcards would have pleased much in America

b. En América estas cartas tendrían mucho éxito.

in America PRX postcards would succeed much

“この葉書、アメリカではおもしろがってもらえるはずだ。”

このことから、イタリア語の近称の機能においてスペイン語の中称と重なりが多いのに対し、スペイン語の遠称との重なりが少なく、またイタリア語の中遠称の機能においてスペイン語の近称との重なりが少ないと言える。

3.3. 両言語における指示形容詞の違い

上記の分析から特徴的なのは、イタリア語の近称とスペイン語の中称の関係が近いのに対し、スペイン語の近称とイタリア語の中遠称の関係が遠いということである。この一見意外であるように思われる非対称性はどのように捉えられるであろうか。

ここで、イタリア語の指示詞の体系を歴史的な視点で捉えなおしてみよう。2節で見たように、そもそもイタリア語の指示詞も三項体系であったのであるが、それが二項体系に統合されたという歴史的経緯をもつ。この変化にはいくつかの解釈が考えられるが、その一つとして2人称と3人称の統合という観点があげられる。発話行為において、絶対的に重要な位置を占めるのは発話者である1人称である。このため、1人称指向をより強めるために、他の二つの人称を統合したと考えることができる。つまり、1人称との差異化を徹底した結果である。この差異化の徹底を裏付けるのが、遠称の *quello* を保持し、中称の *codesto* を破棄したという事実である。2人称に対応する要素を削除することにより、1人称の指示詞とそれ以外の指示詞の違いがより明確になるのである。すると、統合した結果であるイタリア語の二項体系の指示詞において、近称と中遠称との隔たりが大きいものとなる。2節でみたように、指示詞における人称に関する捉え方はスペイン語とイタリア語で基本的に違いはない。このため、1人称に対応するスペイン語の近称と1人称以外に対応するイタリア語の中遠称は関係が遠くなると説明される。

これに対して、三項体系が保持されているスペイン語では、指示詞と人称が厳密に対応している。1人称と2人称は、発話行為という観点からは極めて密接な関係にあり、両者を近づけることは何ら不自然なことではない。López García が1人称と2人称の総体に近称の *este* が対応する状況を設定していることも、両者の関係付けが容易であることを示している。このため、イタリア語の近称とスペイン語の中称の関係が近くなるのである。

また、イタリア語の近称とスペイン語の遠称の関係が遠いという結果が得られたが、これも人称という視点から捉えられる。人称体系において、1人称と3人称はお互いに最も離れた関係にある。このため、2人称を排除して1人称と3人称からなる総体を一つの単位として捉える方法は、少なくとも両言語の指示詞においてはあまり行われぬ。近称と遠称の関係付けは、まさに1人称と3人称のそれに他ならないので、

その重なりが極めて少なくなると説明される。

3.4. 語りと談話の違い

3.3 において提示した分析はテキスト全体において見られる傾向であるが、指示形容詞は直示表現であるため、語りと談話で差が出るということが考えられる。そこで、語りと談話のいずれにも既に提示した傾向が成り立つのかを確かめるために、語りと談話に分けて分布を見ていく。

まずスペイン語の指示形容詞は以下の通りである。

語り

	近称	中遠称	定冠詞	その他
近称 615 例	547(88.9)	24(3.9)	30(4.9)	14(2.3)
中称 654 例	75(11.5)	517(79.1)	35(5.4)	27(4.1)
遠称 1,726 例	29(1.7)	1,429(82.8)	230(13.3)	38(2.2)

談話

	近称	中遠称	定冠詞	その他
近称 488 例	395(80.1)	35(7.2)	33(6.8)	25(5.1)
中称 269 例	67(24.9)	154(57.2)	28(10.4)	20(7.4)
遠称 81 例	2(2.5)	71(87.7)	7(8.6)	1(1.2)

スペイン語の近称がイタリア語の中遠称に対応している例は、語りでは全体の 3.9%で談話では 7.2%、スペイン語の中称がイタリア語の近称に対応している例は、語りでは 11.5%で談話では 24.9%、スペイン語の遠称がイタリア語の近称に対応している例は、語りでは 1.7%で談話では 2.5%となっている。両者でほぼ傾向は同じであるが、スペイン語の中称とイタリア語の近称が対応している例の割合が談話においてかなり高く、スペイン語の近称がイタリア語の中遠称に対応している例の割合も談話において比較的高くなっていると言える。

次に、イタリア語の指示形容詞の分布を示す。

語り

	近称	中称	遠称	定冠詞	その他
近称 704 例	547(77.7)	75(10.7)	29(4.1)	22(3.1)	31(4.4)
中遠称 2,165 例	24(1.1)	517(23.9)	1,429(66.0)	104(4.8)	91(4.2)

談話

	近称	中称	遠称	定冠詞	その他
近称 520 例	395(76.0)	67(12.9)	2(0.4)	19(3.7)	37(7.1)
中遠称 320 例	35(10.9)	154(48.1)	71(21.9)	43(13.4)	17(5.3)

イタリア語の近称がスペイン語の中称と遠称に対応している例は、それぞれ語りでは 10.7%と 4.1%であり、談話では 12.9%と 0.4%である。イタリア語の中遠称がスペイン語の近称に対応している例は、語りでは 1.1%であり、談話では 10.9%である。全体的

傾向と大きな違いが見られるのは談話で、イタリア語の近称とスペイン語の遠称の対応が極めて少ないのに対し、イタリア語の中遠称とスペイン語の近称の対応がかなり多いという点である。

以上のことから、3.3 で提示した分析は特に語りにおいて成り立つものであり、談話には若干異なる傾向が見られると言える。語りとの大きな違いとしては、スペイン語の中称とイタリア語の近称の対応、スペイン語の近称とイタリア語の中遠称の対応の割合が高く、イタリア語の近称とスペイン語の遠称の対応の割合が極めて低いという点である。これは、談話において1人称と2人称の関係の深さと1人称と3人称の関係の疎遠さがより顕著になるためであると考えられる。談話においては、話者が聞き手に対して発話するという行為が話者にとって極めて重要なものとなる。このため、1人称と2人称の心理的距離が縮まり、両者に対応する指示形容詞の間に機能的な重なりが見られることになる。これに対し、3人称は発話行為に関与しない実体であるため、話者からは心理的にかなり遠い存在となる。この傾向は指示詞全体においても見られることは既に指摘したが、談話においては更に強められる。このため1人称と3人称に対応する指示形容詞はかなり明示的に区別されると考えられる。これに対して、語りにおいては指示形容詞が直示的に用いられる例はかなり限られ、照応的用法がかなりの部分を占めると考えられる。このことから、談話に見られる人称間の関係の濃淡がそれ程前面に出ず、スペイン語とイタリア語との指示詞の体系に関する構造的な相違が反映されると言えよう。

3.5. 定冠詞との関係

本稿での分析結果でもう一つ注目に値するのは、指示形容詞に定冠詞が対応している例が少なからず観察されるという点である。これは、指示形容詞と定冠詞以外の要素が対応している例の数に比べ、かなり多いと言える。これは、指示形容詞と定冠詞との機能的連続性を示していると考えられるが、これは歴史的にも明白な事実であると言える。2節で見た Dardano and Trifone が指摘しているように、イタリア語の定冠詞はラテン語の指示詞から派生したものである。同様の指摘はスペイン語について Leonetti(1999)が行っている。共時的にも両者の機能は共通している部分が見出される。Leonetti は、両者の文法的な相関関係を示すことは難しくはないとする。すなわち、両者は名詞に前置される定の決定詞であり¹⁰、どちらも定の要素に特徴的な照応の特質を表す。そのことによって、文脈においてすでに存在している情報を参照することができる。

このように、定冠詞は指示形容詞と密接な関係にあるが、各指示形容詞との対応という点では差が生じている。スペイン語の近称指示形容詞にイタリア語の定冠詞が対応している例は近称形容詞全体の 5.7%、中称では 6.8%、遠称では 13.1%である。また、イタリア語の近称指示形容詞にスペイン語の定冠詞が対応している例は 3.3%であるのに対して、中遠称では 5.9%となっている。いずれも1人称に対応する近称が少なく、3人称に対応する(中)遠称が多いという結果となっている。特に、スペイン語の

¹⁰ ただし、スペイン語の場合指示詞は名詞の後ろの場所に置くことも可能である。
el asunto aquel (あの件)

遠称における比率の高さが顕著である。

この事実を説明する上で有益なのは、Leonetti が指摘している定冠詞と指示形容詞との性質の違いである。冠詞は指示対象が一義的に同定されうることを単純に示すのに対して、指示詞は指示対象がコミュニケーションの状況において感知されうる、または、談話において事前に言及したことからつきとめられるということが必要とする。これは、指示詞が直示表現であるという根本的な性質に由来すると考えられる。2 節で見た López García の主張に従えば、直示は発話者を起点としている。すなわち、直示において最も重要なのは 1 人称であるということである。逆に、発話者から最も遠い関係にある 3 人称は直示表現と最も関係が薄い概念であると言える。すると、3 人称と関係づけられる遠称が直示表現としての性質が最も弱く、直示的ではない指示的同定機能を果たす定冠詞との共通性が高いと捉えられる。このため、両言語において 3 人称と関係づけられる指示形容詞が定冠詞と交替する割合が高くなると説明される。

上記の結果でもう一つ注目されるのは、スペイン語とイタリア語における定冠詞の対応に関する差である。すなわち、イタリア語の指示形容詞にスペイン語の定冠詞が対応している例が、スペイン語の指示形容詞にイタリア語の定冠詞が対応している例よりも割合が低いのである。この事実は、若干ながらスペイン語の指示形容詞の方がイタリア語の指示形容詞よりも機能の範囲が広いという可能性を示唆している。このことは、全テキストにおける指示形容詞の出現数の差としても表れている。それ程大きな差であるとは言えないが、スペイン語は 3987 例であるのに対し、イタリア語は 3902 例である。では、どのような機能の違いが両言語の指示形容詞にあると考えられるであろうか。この問題は定冠詞の機能との関係が関わるため、定冠詞の分布を詳細に検討しなければ明確な解答を得ることはできない。そのため、ここではあくまでも可能性を提示するにとどめておきたい。

既に述べたように、イタリア語においては *codesto* の廃棄による体系内の統合が行われたため、指示詞が本来もつ直示機能が弱められたと捉えられる。直示機能は 1 人称を起点として三つの人称を区別することにその本質があるからである。その結果、指示形容詞と定冠詞との機能分化が弱まり、指示形容詞の機能と定冠詞の機能が重なる部分が大きくなったという要因が一つの可能性として考えられる。

もう一つの可能性として考えられるのが、両言語における冠詞の使用頻度の差である。Fujita(2013)における不定冠詞の分布の考察で指摘したように、スペイン語ではイタリア語よりも無冠詞名詞句がより頻繁に用いられる。定冠詞の分布に関する対照分析はまだ行っていないのでまだ推測の域を出ていないが、スペイン語においてイタリア語よりも定冠詞が用いられる頻度が低いということは十分考えられることである。すると、イタリア語における定冠詞の機能の範囲がスペイン語のそれよりも広いため、スペイン語の指示形容詞の機能の一部をイタリア語の定冠詞が担っているという可能性もありえよう。

いずれにしても、両言語における定冠詞の詳細な分析を進め、本稿の分析とは逆方向から指示形容詞との対応を分析することによって、両言語の指示形容詞の機能の違いが明らかになるはずである。

4. 結論

本稿では、三項体系であるスペイン語の指示詞と二項体系のイタリア語の指示詞の分布上の対応を観察し、両者の関係を明らかにすることを試みた。特徴的な傾向として、スペイン語の中称とイタリア語の近称が近い関係にあること、スペイン語の近称とイタリア語の中遠称が遠い関係にあること、スペイン語の遠称とイタリア語の近称が遠い関係にあることが観察された。本稿は、指示詞と人称の関係を中心軸にすえることによってこの現象を説明した。すなわち、近称は1人称、中称は2人称にそれぞれ対応し、1人称と2人称は密接な関係にあるので、近称と中称は近い関係として捉えられる。これに対して、遠称は3人称に対応するので、これと遠い関係にある1人称に対応する近称とは遠い関係となる。イタリア語の中遠称は2人称を排除した形式なので、結果として1人称から遠ざかることとなり、スペイン語の近称と遠い関係となるのである。

また、談話に見られる特異な傾向として、スペイン語の中称とイタリア語の近称の対応、及びスペイン語の近称とイタリア語の中遠称の対応の割合が高いことを指摘した。これは、談話における発話行為の特徴として1人称と2人称の関係の緊密化を想定することによって説明した。語りではイタリア語の中遠称が2人称の排除による3人称への移行という過程をはっきりと示しているのに対し、談話では2人称の存在が大きな位置を占めることから1人称との関係付けが顕著に見られるのである。更に、イタリア語の近称とスペイン語の遠称の関係が、談話において顕著に隔てられていることも観察された。これは、1人称と2人称の関係とは反対に、1人称と3人称の関係を疎遠化するという操作が談話において機能しているためであると説明した。

最後に、指示形容詞と定冠詞との関係についても考察を行った。両言語において共通に見られる傾向として、3人称に対応する(中)遠称の方が1人称に対応する近称よりも定冠詞と関係が近いことがあげられる。これは、遠称の指示形容詞が最も直示性の低い要素であり、非直示的な要素である定冠詞と機能的に近いためであると説明した。更に、スペイン語の指示形容詞にイタリア語の定冠詞が対応している例の方が、イタリア語の指示形容詞にスペイン語の定冠詞が対応している例よりも割合が高いことも指摘した。これは、スペイン語の指示形容詞の方がイタリア語の指示形容詞よりも機能の範囲が広いことを示していると言える。この理由については二つの可能性を提示したが、まだ検討すべき点が残されている。

本稿は、両言語の指示形容詞の対応関係について、現段階で得られた結果をもとにして考察を進めたものであり、まだ残された課題がある。一つは、語りと談話という文体上の区別にとどまらず、それぞれの指示詞の機能によって分類した上で考察を進めることが不可欠であろう。更には、指示形容詞と深い関係をもつことが明らかになった定冠詞について分析を進めていくことも将来的に視野に入れるべき方向性であると言える。

参考文献

Andorno, Cecilia (1999) *Dalla grammatica alla linguistica*, Paravia, Torino.

- Benveniste, Émile (1966) *Problèmes de linguistique générale, 1*, Gallimard, Paris.
- Butt, John and Carmen Benjamin (2004) *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, Arnold, London.
- Bühler, K (1979) *Teoría del lenguaje*, Alianza, Madrid.
- Dardano, Maurizio and Petro Trifone (1997) *La nuova grammatica della lingua italiana*, Zanichelli, Bologna.
- De Bruyne, Jacques (1995) *A Comprehensive Spanish Grammar*, Blackwell Publishing, Oxford.
- Eguren, Luis J. (1999) “Pronombres y adverbios demostrativos. Las relaciones deícticas”, in Bosque, Ignacio and Violeta Demonte (eds.), *Gramática Descriptiva de la Lengua Española*, pp.929-972, Espasa, Madrid.
- Enríquez, Emilia-V. (2000) “El sistema pronominal del español”, in Alvar, Manuel (ed.), *Introducción a la Lingüística española*, pp.307-329, Editorial Ariel, Barcelona.
- Fujita, Takeshi (2013) “Propiedades sintácticas del artículo indefinido en español y en italiano”, 『北海道大学文学研究科紀要』第141号, pp.1-34.
- Hernández Alonso, César (1984) *Gramática funcional del español*, Gredos, Madrid.
- Lamíquiz, Vidal (1987) *Lengua española*, Editorial Ariel, Barcelona.
- Leonetti, Manuel (1999) “El artículo”, in Bosque, Ignacio and Violeta Demonte (eds.), *Gramática Descriptiva de la Lengua Española*, pp.787-890, Espasa, Madrid.
- López García, Ángel (1998) *Gramática del español III. Las partes de la oración*, Arco Libros A.A., Madrid.
- Maiden, Martin and Cecilia Robustelli (2000) *A Reference Grammar of Modern Italian*, Arnold, London.
- Maingueneau, Dominique (1994) *L'énonciation en linguistique française*, Hachette, Paris.
- Matte Bon, Francisco (1995) *Gramática Comunicativa del español Tomo I*, Edelsa, Madrid.
- Renzi, Lorenzo et al. (2001) *Grande grammatica italiana di consultazione*, il Mulino, Bologna.
- Sensini, Marcello (1997) *La grammatica della lingua italiana*, Oscar Mondadori, Milano.
- Serianni, Luca (1997) *Italiano*, Garzanti Editore, Milano.

引用テキスト

- André Malraux (1979) *La condición humana*, Traducción de César A. Comet, Edhasa, Barcelona.
- André Malraux (1997) *La condizione umana*, Traduzione di A. R. Ferrarin, Bompiani, Milano.
- Arturo Pérez-Reverte (2001) *El Capitán Alatriste*, Alfaguara, Madrid.
- Arturo Pérez-Reverte (2006) *Capitano Alatriste*, Traduzione di Roberta Bovaia, Marco Tropea Editore, Milano.
- Ernest Hemingway (1955) *Adiós a las armas*, Traducción de Joana M. Vda. Horta y Joaquim Horta, Luis de Caralt Editor, Barcelona.
- Ernest Hemingway (1956) *Addio alle armi*, Traduzione di Fernanda Pivano, Arnoldo Mondadori Editore, Milano.
- Italo Calvino (1993) *Il barone rampante*, Arnoldo Mondadori Editore, Milano.

Italo Calvino (1998) *El barón rampante*, Traducción de Esther Benítez, Ediciones Siruela, Madrid.

Mario Vargas Llosa (1987) *El hablador*, Santillana Ediciones Generales, Madrid.

Mario Vargas Llosa (2010) *Il narratore ambulante*, Traduzione di Angelo Morino, Einaudi, Torino.

Umberto Eco (1994) *L'isola del giorno prima*, RCS Libri S.p.A., Milano.

Umberto Eco (1997) *La isla del día de antes*, Traducción de Helena Lozano Miralles, Random House Mondadori, Barcelona.

執筆者紹介

所属：北海道大学大学院文学研究科西洋言語学講座

E-mail： fujitat@let.hokudai.ac.jp

専門分野：統語論、ロマンス語学